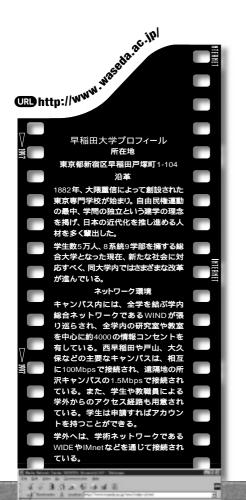
早稲田大学

メディアネットワークセンター

都内の中心に位置し、5万人の学生を擁するマンモス私立大学として知られる早稲田大学。 最近のネットワーク施設の拡充には目を見張るものがある。今回は、学内のネットワーク化を 推し進めている早稲田大学メディアネットワークセンターを訪ね、最近公開した電子博物館プ ロトタイプの研究を中心に、早稲田大学の大学教育とインターネットとのかかわりをうかがっ





早稲田大学メディアネットワークセンター (MNC)

PROPERTY WATER * 1834 - MARRIED LA STATE - LA CALLES (1904 1906)

THE CASE OF THE PARTY OF THE PA EH #1

· PRESENTATION OF THE REAL CASE CASE

メディアネットワークセンターのホームページ。 URL http://www.waseda.ac.jp/mnc/index-j.html

. INC. S. ST. CONTRACT OF STREET, STRE

(道) エ 大学でも最近できた機関ですが、いつど のような目的で発足したのですか

早稲田大学の情報関連組織は、研究教 育系と業務系、学術情報系の3つに分かれ ていました。これらを、情報化推進を目的に して1つにまとめ、1996年6月に発足したの がメディアネットワークセンター(MNC)です。

現在、早稲田大学では、1996年から3年 ごとに3期間に分けて情報化を推進してい ます。最初の3年間は、インフラの整備とい うことで、キーワードは「5万人が使える環境 整備」です。この5万人というのは、早稲田 大学にかかわる人すべてという意味です。 次の3年間は、「大学の研究教育のオープン 化」です。そして、最後の3年間はそういった インフラや教育システムを受けて早稲田大 学のありかたが本当の意味での世界の大 学、グローバルな早稲田大学になっていく。 こういった筋書きを描いて、MNCはその中 心となって活動しています。

そのような筋書きのなかで、申請してきた すべての学生にアカウントを発行しています。 今年の新入生には、全員にアカウントを発行 しており、入学時のガイダンスはずいぶん盛 況でした。今では、学内でアカウントを持つ 学生数は3万人を超えています。 ちょっとし たプロバイダー並みですね(笑)



商 電子博物館のプロトタイプを発表されま したが その研究を始めた経緯を教えて ください。

情報推進化の筋書きの中で、2期目の目 標は「研究教育のオープン化」としています。

その計画を進めるには、よい事例を示し たうえで、どんな先生がどんな中身を、どん な形で授業や研究に使いたいのかという話 を受けながら計画を進める必要があります。 そこで、よい事例としてあげられそうなのが図 書館と博物資料の電子化なのです。

早稲田大学の図書館の所蔵している文献 は世界に誇れるもので、そのほとんどを収







電子博物館のデータを作成してい るところ。ビデオや録音機器など さまざまな機材が並ぶ。

夏休み中に、ネットワークを強化す べく工事が行われていた。

めた早稲田の図書館データーベースは日本 を代表するものなのですが、外部とのデータ のやり取りに何かと制約があります。これ を、もっとオープンにした、文献そのものも閲 覧できる新しい電子図書館を作ろうという計 画を検討しています。

もう1つの博物資料ですが、早稲田大にあ る膨大な量の資料を陳列できる博物館を作 ろうとすれば巨大な建物が必要になってしま います。

そこで、博物資料を電子化して、コンピュー タで自由に検索や閲覧ができるようにして授 業や研究に使えるようにして、実際の資料 は小さなスペースで少しずつ展示できるよう にするというのが電子博物館の計画でした。

このような計画を検討しているなか、文学 部のほうでも自分たちの持っている博物資料 を電子化して授業に使えるようにならないか と盛り上がっていて、それに関したプロジェ クトが文学部に発足していました。そこからぜ ひ電子化を始めてみたいという提案がMNC に来たのです。

それが、われわれがやろうとしている電子 博物館の話とぴったりと目標が合うというこ とで、スタートしたのです。

🕯 電子博物館のコンテンツはどのように作 。 成しているのですか。

博物館の資料そのものや、貴重でデリケー トな資料を取り扱うノウハウは当然、文学部 にあります。しかし、デジタル化するノウハウ はこちらにあります。

ですから、文学部で提供してくる博物資料 をどうデジタル化すれば効果的なものになる かをMNCで検討します。その結果、共同研 究しているNTTソフトウェア研究所とMNCが 資料をデジタル化するのですが、その実作業 にはコンピュータ技術だけではだめで、文 学部の研究者の持つ資料の取り扱いのノウ 八ウが必要になるのが分かりました。

このように、お互いの持っているところをう まく使って作成しています。このプロトタイプか ら、電子博物館を作るための共通方式がで

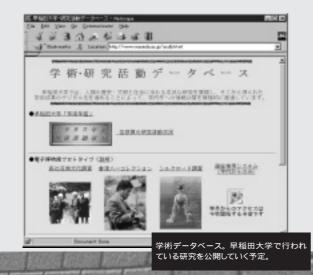
きあがれば、他の先生や学部も独自の電子 博物館を作っていけるというわけです。

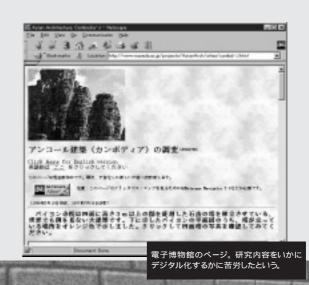


※ くと、大学はどのように変わっていくので しょうか

今までの講義のような知識を与えることは、 ネットワークにまかせればよくなるでしょう。 講 義の資料を見るには、ウェブサイトにアクセス すればいいわけで、実際に学校に来る必要 はないのですから。

そのうえで、メインの授業は、教授と考えた リディスカッションしたり発表したりするとい うような少人数のゼミのような形になっていく かもしれません。また、大学が都心にあるとい うメリットを生かして、学生だけでなく社会人 もそういった少人数の授業に参加できるとい う形になるかもしれませんね。









「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

この PDF ファイルは、株式会社インプレス R&D (株式会社インプレスから分割)が 1994 年~2006 年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面を PDF 化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

http://i.impressRD.jp/bn

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の 非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接的および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先 株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部 im-info@impress.co.jp